二〇二二年八月一九日

一日を包みて木槿落ちにけり　うつぎ
新涼や肌にしみこむ化粧水　満天
飛行雲大夕焼を二分けす　きよえ
カーテンを押しのけてくる秋気かな　満天
二階へとのぼる糸瓜の青簾　智恵子
朝顔の蔓ととのへて出勤す　ひのと
己が影と追いかけつこの蜻蛉かな　はく子
去る船の水脈いつまでも秋入日　ひのと
大文字消えてかそけき山の影　せいじ

二〇二二年八月一八日

石畳たたら踏ませし蝸牛　こすもす
雷鳴に小走りとなる帰り道　かえる
追伸に店畳むこと秋燈　ひのと
和箪笥のひきだし重き秋湿り　む　べ
最後まで話聞いてよ法師蝉　もとこ
投網うちひろげしごとく鰯雲　あひる
月さして水槽の魚ひるがへる　ひのと
朗吟の声響かせて星月夜　千　鶴

二〇二二年八月一七日

つくばひの杓を離るゝ蜻蛉かな　ひのと
灯下親し古りし机の輪染みかな　たか子
登山帽脱いで一礼磨崖仏　みきお
白萩や遠流の島の能舞台　澄　子
大文字ビルのあはひに現るる　あひる
肩車せし子の指呼に大文字　せいじ
大いなる夜の帳に大文字　あひる
船を出す父の背中へ秋日燦　ひのと
生身魂むかしむかしは三人娘　宏　虎

二〇二二年八月一六日

好物の珈琲飲ませ送り盆　うつぎ
驟雨急善意の傘に助けられ　みきえ
流灯の橋裏の闇照らしつつ　素　秀
老いてなほお洒落忘れぬ生身魂　明日香
帰省の子自分の部屋を断捨離す　ぽんこ
這う如くぞめきの中を阿波踊り　たか子

二〇二二年八月一五日

初盆や父の座椅子のでんとあり　なつき
吾子の手に余る鈴緒や秋湿り　ひのと
書きだしに迷ふ手紙や秋暑し　む　べ
風船葛遊んでゐたる風の精　うつぎ
初盆や父知らぬ嬰加はれり　なつき
電話ボックスまず蜘蛛の囲を払はねば　よう子
闇に浮く五重の塔や万灯会　ぽんこ
直立の脚絆の父や終戦忌　素　秀

二〇二二年八月一四日

朝採れの秋茄子母の仏前に　豊　実
金にゆれ銀にそよげり芒の穂　む　べ
ふるさとの青田に風のあそびけり　ひのと

二〇二二年八月一三日

連獅子のごと草煽ち台風来　む　べ
小さきシャツ物干しにゆれ盆休み　もとこ
寝惜しみて亡夫と明かす盆の月　うつぎ

毎日句会みのる選・二〇二二年八月二一日